

## 「仕事」と「時間」との関係について

なかがわ よしあき  
中川 義明

●自動車総連・副事務局長

「仕事」と今話題の労働時間との関係について、自分自身の経験を踏まえ個人的に書き連ねたいと思います。

まず私の仕事歴を簡単に紹介させてください。学生時代のアルバイト（コンビニ、飲食店、家庭教師など）を経て、プラスチックメーカーに就職しユーザーの用途に合わせプラスチックの配合処方や調色の設計、2年後に自動車メーカーに転職し生産技術の開発に従事してきました。現在は産別組合の専従役員をつとめております。

学生時代のアルバイトでは、時給で働いていたので、働けば働くほどアルバイト代も稼ぐことができました。プラスチックメーカーでは月給制でしたが、ユーザーからの仕事が多いときは残業もあったので残業代も当然支払われておりました。これらの仕事は、職種は違いますが、時間と仕事量が正比例の関係であったと思います。

つまり「労働時間」＝「仕事量」＝「賃金」という式が成り立つと言えます。

自動車メーカーでの業務についてですが、開発テーマのいちメンバーとして働いていた若い頃は、テーマのプロジェクトリーダーの指示のもと、実験やデータまとめ、資料作成をしており、前述と同様に「労働時間」＝「仕事量」＝「賃金」が成り立ちます。

経験を重ね、テーマのなかでもある程度まとめ役となると（とはいっても管理職やプロジェクトリーダーではなく、年齢も30歳前後）、開発日程をにらんで時間の使い方やメンバー、予算、設備、技術要素などをマネジメントすることが求められます（いわゆるヒト・モノ・カネ・日程・技術などのマネジメント）。そうすると、必ずしも「労働時間」と「仕事量」もし

くは「成果」がイコールではありません。しかしながらコントロールする幅ができて、全体の仕事量を調節することやメンバーを増やすこと、そもそもの開発日程を変更することなど難しく、限られた幅の中でのマネジメントであり、「労働時間」≡「仕事量」≡「賃金」という図式ともいえます。

さらに私の上位者であったベテラン研究者・技術者（時間管理をされない管理職の一步手前）になると、裁量はあるものの時間管理をされ、また、予算が決められていることもあり、残業もできず厳しい働き方となるケースが多々ありました。職種だけでなく、経験、役割により、時間と仕事量の関係は異なると考えられます。

また、私自身の出身組合での専従活動、産別組合での活動についてですが、時間に縛られて活動が成り立つかと聞かれれば、開発業務と似たようなところがあり、経験、役割によると答えるべきでしょう。

現在「時間外労働の上限規制」の議論に隠れてはおりますが、高度プロフェッショナル制度の創設や裁量労働制の対象業務拡大が既に議論されています。年収だけで高度プロフェッショナルかどうかを判断することが難しいのは当然ですし、開発業務という職種は既に裁量労働制の対象職場ではありますが、労使で議論する上では、より慎重であるべきと考えます。

最後に当たり前ですが、生活するためにはお金が必要です。お金のために仕事をし余暇を楽しむという価値観を否定するわけではありませんが、仕事を通して、世の中のためになるとか、自分自身の成長、自己実現など色々な目的をもつことが、働くモチベーションにもつながることと思います。